世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

トゥルシーダース作『ハヌマーン・チャーリーサー』翻訳

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学仏教文化研究所 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): トゥルシーダース, 『ハヌマーン・チャーリーサー』, アワディー語, 『ラーマーヤナ』 キーワード (En): 作成者: 佐藤, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000240

A Japanese Translation of Tulsidas's *Hanuman Chalisa*

SATO Hiroyuki

Summary

Hanuman Chalisa is a collection of hymns in praise of Hanuman written in Awadhi language by Tulsidas (1532-1623). In India there are many hymns in praise of God, in which one of the most famous is *Hanuman Charlisa*. It is often said that *Hanuman Charlisa* is the essence of Indian culture. This *Hanuman Charlisa* firstly intends Hindus to recite but not to understand the meaning of the content. *Hanuman Charlisa* is written in Awadhi language, so that most Hindus reciting it don't seem understand its meaning. However, of course, the content of *Hanuman Charlisa* has important meaning. Therefore, this paper attempts to translate *Hanuman Charlisa* into Japanese and helps to understand Indian culture.

Tulsidas was a devotee of Ram who is one of the incarnations of Vishnu. He was born in present-day Uttar Pradesh state into a Brahmin family in 1532. After separating from own parents in his childhood, he started to live in a temple where he awakened to faith in Ram and moved into in Ayodhya, Ram's birthplace. It is said the he died in Varanasi in 1623.

In his life Tulsidas wrote 12 works in Awadhi and Braj languages which is the literary languages of the time and dialects of Hindi. *Ram Charit Manas* consisted of about 10,000 lines of stanzas is his most representative work and is recognized as one of the holy texts of Hinduism. This work has been recited, read and handed down by many Hindus to this day. It is no exaggeration to say that the *Ram Charita Manas*, along with the *Bhagavad Gita*, is most important Hindu scripture.

Though the meaning of *Hanuman Charlisa* is "Forty hymns to Hanuman," it consists of forty-three hymns which include forty hymns written in the prosody *chaupai* with two introductory hymns and one concluding hymn written in the prosody *doha*. The content of it almost focuses on Hanuman's achievements based on the *Ramayana*.

Awadhi is a language spoken in the area called Awadh and is one of the dia-

lects of Hindi. Awadh refers to the area east of the Ganges River in present-day Uttar Pradesh, and was sometimes called “Ayodhya.” Awadhi language has some similarities with Hindi, but there are many differences.

トゥルシーダース作『ハヌマーン・チャーリーサー』翻訳

佐　藤　裕　之

トゥルシーダース作『ハヌマーン・チャーリーサー』翻訳

佐藤　裕之

〈キーワード〉 トゥルシーダース／『ハヌマーン・チャーリーサー』／アワディー語／『ラーマーヤナ』

『ハヌマーン・チャーリーサー（*हनुमान चालीसा*）』は、トゥルシーダース（तुलसीदास, 1532-1623）によってアワディー語（अवधी）で書かれた小篇で、ハヌマーンを讃えた讃歌集である。インドには神を讃えた讃歌集が数多くあるが、その中で最も有名なものの1つが『ハヌマーン・チャーリーサー』で、インド文化の精髄と言うこともできる。このような『ハヌマーン・チャーリーサー』は、そもそも読誦を目的としたもので、必ずしも内容の理解を目的とはしていない。読誦しているヒンドゥー教徒たちも、ヒンディー語の方言であるアワディー語で書かれていることもあり、必ずしも内容の意味は理解していないと思われる。しかし、当然ながら、その意味はある。従って、本稿は、現在まで『ハヌマーン・チャーリーサー』の日本語訳がない中で、その日本語訳を試み、インド文化を理解するための一助とする。

トゥルシーダースは、ヴィシュヌ（विष्णु）の化身であるラーム（राम）[1]を熱心に信仰する詩人で、1532年に現在のウッタル・プラデーシュ（उत्तरप्रदेश）州のバラモンの家に生れたとされる。幼少期に両親と別れ、寺院に身を寄せ、そこでラームへの信仰に目覚め、ラームの生誕地であるアヨーディヤー（अयोध्या）に住んだ後、ワーラーナシー（वाराणसी）に移り、その地で1623年に没したといわれている。

(4)

トゥルシーダースは、当時の文学言語であり、ヒンディー語の方言であるアワディー語とブラジュ語（ब्रजभाषा）によって、12の作品を残した[2)]。最も代表的な作品は『ラーマーヤナ（*रामायण*）』を翻案した『ラーム・チャリット・マーナス（*रामचरितमानस*）』で、約1万行の詩からなり、ヒンドゥー教の聖典の1つとも認められ、現在に至るまで、多くのヒンドゥー教徒たちによって、読まれ、語り継がれている。『ラーム・チャリタ・マーナス』は、『バガヴァッド・ギーター（*भगवद्गीता*）』と並び、代表的なヒンドゥー教の聖典といっても過言ではない。

『ハヌマーン・チャーリーサー』を敢えて訳せば『ハヌマーンへの40の讃歌集』になる。40の讃歌は「チャウパーイー（चौपाई）」という韻律で書かれ、他に「ドーハー（दोहा）」という韻律で書かれた序にあたる2つの讃歌と結びにあたる1つの讃歌を加え、実際、『ハヌマーン・チャーリーサー』は43の讃歌からなっている。内容は、ハヌマーンの偉業が中心で、その多くは『ラーマーヤナ』を題材としている。

アワディー語は、「アワド（अवध）」と呼ばれていた地域で使用されている言語[3)] で、ヒンディー語の方言の１つである。アワドは現在のウッタル・プラデーシュ州のガンジス河の東一帯を示し、「アヨーディヤー」と呼ばれたこともあった。アワディー語はヒンディー語と共通する点もあるが、異なる点も多くある。まず、発音が異なり、発音の相違によって、表記も異なることがある。例えば、ण は न となり गुण は गुन と表記され、य は ज となり यमुना は जमुना に、व は ब となり वचन は बचन に、श は स となり शब्द は सब्द と表記される。さらに क्ष は च्छ となり रक्षक は रच्छक に、प्य は पिय となりप्यार は पियार に、प्र は पर となり प्रदेश は परदेश と表記される[4)] 。さらに、動詞の語根も異なり、変化・活用も異なっている。例えば、動詞語根の गाना は गावब に、三人称・単数・現在形の जाता है は जाई に、同じく三人称・単数・現在形の मिटता है は मिटै に、命令形の दीजिए は देहु に、過去分詞・男性・単数の किया は कीन्हा になる。これらの他にも、代名詞や接続分詞等にも相違がある。そして、アワディー語といっても、時代や地域によって異なる点もあり、動詞の活用をとって

みても、決して一様ではなく、ここにあげた例は『ハヌマーン・チャーリーサー』で使用されているものに限定している。

翻訳にあたっては、以下のpp.119-123に収録されたテキストを底本とした。

श्रीमद्गोस्वामी तुलसीदासजीविरचित *श्रीरामचरितमानस सुन्दरकाण्ड,* सचरित्र, सटीक श्रीहनुमानचालीसासहित, मोटा टाइप, गीता प्रेस, गोरखपुर, सं० २०७९.

他にも以下のテキストを参照し、異読がある場合は、注に示した[5)]。また、以下のテキストに付された英訳とヒンディー語訳も随時参照した。

Hanuman Chalisa, published & printed by Srinivas Fine Arts (P)Ltd, Sivakasi, Tamil Nadu, India, 2017.
Hanuman Chalisa, Prakash Books India Pvt. Ltd., New Delhi, 2020.
Sri Hanuman Chalisa (Forty Verses on Hanuman) for Easy Reciting with English Translation, Nepal, 2020.
श्री हनुमान चालीसा, Srikunj Sadbhavana Manch, New Delhi.
Hanuman Chalisa: Hindi with English Transliteration and Translation.

訳文における丸括弧は説明であり、角括弧は文意を明らかにするための補足である。

दोहा（ドーハー）
श्रीगुरु चरन सरोज रज निज मनु मुकुरु सुधारि ।
बरनउँ[6)] रघुबर बिमल जसु जो दायकु फल चारि ॥

尊師の蓮華のような足の［花粉のような］塵によって、
私は、自らの心の鏡を浄め、
四つの果報[7)]を与えるラグヴァル（＝ラーム）[8)]の

汚れのない名誉を讃える。

बुद्धिहीन तनु जानिके सुमिरौं[9] पवनकुमार ।
बल बुधि[10] बिद्या देहु मोहिं[11] हरहु कलेस बिकार ॥

パヴァンの子（＝ハヌマーン）[12] よ。
私は［この］身を愚かと認め、［あなたを］想う。
力と知恵と知識を私に与えて下さい。
［私の］苦悩と弱さを取り除いて下さい。

चौपाई （チョウパーイー）
जय हनुमान ज्ञान गुन सागर । जय कपीस तिहुँ लोक उजागर ॥१॥

ハヌマーンに栄光あれ。
知識と美徳の海のような者よ。
猿族の主に栄光あれ。三界[13] で光り輝く者よ。

राम दूत अतुलित बल धामा । अंजनिपुत्र पवनसुत नामा ॥२॥

ラームの使者よ。比類ない力の持ち主よ。
アンジャニー[14] の子よ。
「パヴァンの子」という名を持つ者よ。

महाबीर बिक्रम बजरंगी । कुमति निवार सुमति के संगी ॥३॥

偉大な勇士よ。雄々しい者よ。
稲妻のような体を持つ者よ。
悪い考えを取り除く者よ。善い考えと伴にある者よ。

कंचन बरन बिराज सुबेसा । कानन कुंडल कुंचित केसा ॥४॥

黄金の色をした者よ。
輝く美しい衣服を着た者よ。
耳に耳輪を付けた者よ。ちぢれた髪を持つ者よ。

हाथ बज्र औ ध्वजा बिराजै । काँधे मूँज जनेऊ साजै ॥५॥

稲妻［のような武器］[15] と旗を持つ
［あなたの］手は輝き、
文若草の聖紐が肩を飾っている。

संकर सुवन केसरीनंदन । तेज प्रताप महा जग बंदन ॥६॥

シャンカル（＝シヴ）の化身[16] よ。
ケースリー[17] の子よ。
［あなたの］偉大な威光と威力は世界で称讃［される］。

बिद्यावान गुनी अति चातुर । राम काज करिबे को आतुर ॥७॥

知識がある者よ。美徳がある者よ。
秀でた能力がある者よ。
ラームの役に立つことを強く願っている者よ。

प्रभु चरित्र सुनिबे को रसिया । राम लषन[18]　सीता मन बसिया ॥८॥

主（＝ラーム）の行いを聞くことに
［あなたは］喜びを感じる。

(8)

［あなたの］心は
ラームとラクシュマンとシーター[19] が住む場所である。

सूक्ष्म रूप धरि सियहिं दिखावा । बिकट रूप धरि लंक जरावा ॥९॥

［あなたは］小さな姿になって、
シヤー（＝シーター）[20] の前に現われた[21]。
大きな姿になって、
ランカー［島］[22] を焼いた[23]。

भीम रूप धरि असुर सँहारे । रामचंद्र के काज सँवारे ॥१०॥

［あなたは］恐ろしい姿になって、
悪魔たちを退治した。
［あなたは］ラームチャンドル（＝ラーム）[24] の役目を果たした。

लाय सजीवन[25] लखन जियाये । श्रीरघुबीर हरषि उर लाये ॥११॥

［あなたは］蘇生草を取って来て、
ラクシュマンを生き返らせた[26]。
聖ラグヴィール（＝ラーム）[27] は喜び、
［あなたを］抱きしめた。

रघुपति कीन्ही[28] बहुत बड़ाई । तुम मम प्रिय भरतहि सम भाई ॥१२॥

ラグパティ（＝ラーム）[29] は［あなたを］とても讃えた。
「お前は、私の愛しい弟のバラタ[30] のようだ。」
［ラームはそう言った。］

सहस बदन तुम्हरो जस गावैं । अस कहि श्रीपति कंठ लगावैं ॥१३॥

「何千人もがお前を讃える歌を歌う」と言って、
聖なる主（＝ラーム）は［あなたを］抱きしめる。

सनकादिक ब्रह्मादि मुनीसा । नारद सारद सहित अहीसा ॥१४॥

サナク[31]等の聖者、ブラフマー[32]等の神、
ナーラド[33]、シャールダー（＝サラスヴァティー）[34]、
蛇の王（＝シェーシュナーグ）[35]も一緒に［あなたを讃える］。

जम कुबेर दिगपाल[36] जहाँ ते । कबि कोबिद कहि सके[37] कहाँ ते ॥१५॥

ヤム[38]、クベール[39]、方位の守護者たちは
あなたを［讃えることができない］[40]。
どうして、詩人、賢者が
あなたを讃えられるだろうか。

तुम उपकार सुग्रीवहिं कीन्हा । राम मिलाय राज पद दीन्हा ॥१६॥

あなたは恵みをスグリーヴ[41]にもたらした。
ラームに会わせ、
王座を［スグリーヴに］与えた[42]。

तुम्हरो मंत्र बिभीषन माना । लंकेस्वर भए सब जग जाना ॥१७॥

あなたの助言をヴィビーシャン[43]は受け入れた。
［ヴィビーシャンは］ランカー［島］の支配者になった[44]。

全世界は［このことを］知っている。

जुग सहस्त्र जोजन पर भानू । लील्यो ताहि मधुर फल जानू ॥१८॥

太陽は千ヨージャン[45]［離れ］、
千ユグ[46]［かかって、辿り着く］。
［あなたは］その太陽を甘い果物と考え、
飲み込んだ。

प्रभु मुद्रिका मेलि मुख माहीं । जलधि लाँघि गये अचरज नाहीं ॥१९॥

［あなたは］主（＝ラーム）の指輪を口に加え、
海を越えて行った[47]。
［これは］驚くことではない。

दुर्गम काज जगत के जेते । सुगम अनुग्रह तुम्हरे तेते ॥२०॥

世界のどんなに困難なことも、
あなたの恩恵で簡単になる。

राम दुआरे तुम रखवारे । होत ना आज्ञा बिनु पैसारे ॥२१॥

あなたはラームの［宮殿の］門の守衛者である。
［あなたの］許可がなければ、入れない。

सब सुख लहै तुम्हारी सरना । तुम रच्छक काहू को डर ना ॥२२॥

あなたに帰依すれば、
全ての幸福が手に入る。

あなたは保護者である。何の恐れもない。

आपन तेज सम्हारो आपै । तीनों लोक हाँक ते[48] काँपै ॥२३॥

あなた自身の力はあなただけによって制御される。
三界は［あなたの］叫び声に震えている。

भूत पिसाच निकट नहिं आवै । महाबीर जब नाम सुनावै ॥२४॥

マハーヴィール（＝ハヌマーン）[49] の名前を聞かせれば、
悪霊も悪鬼も近くに来ない。

नासै रोग हरै सब पीरा । जपत निरंतर हनुमत बीरा ॥२५॥

勇者ハヌマーン［の名前］を常に唱えれば、
病気がなくなり、
全ての苦しみもなくなる。

संकट तें[50] हनुमान छुड़ावै । मन क्रम बचन ध्यान जो लावै ॥२६॥

ハヌマーンよ。
心と行為と言葉で［あなたを］想う人は、
困難から解放される。

सब पर राम तपस्वी राजा । तिन के काज सकल तुम साजा ॥२७॥

全ての人にとって、
ラームは苦行者の王である。
ラームために、あなたはあらゆる役目を果たした。

और मनोरथ जो कोइ लावै । सोइ[51] अमित जीवन फल पावै ॥२८॥

そして、［あなたに］願いごとをする人は誰でも、
無限の人生という果報を手に入れる。

चारों जुग परताप तुम्हारा । है परसिद्ध जगत उजियारा ॥२९॥

あなたの威力は
四つのユグの時代に知れ渡り、
世界を照らす。

साधु संत के तुम रखवारे । असुर निकंदन राम दुलारे ॥३०॥

あなたは善人と聖者の守護者であり、
悪魔の破壊者である。
ラームに愛されている者よ。

अष्ट सिद्धि नौ निधि के दाता । अस बर दीन जानकी माता ॥३१॥

八つの神通力[52] と九つの宝[53] を
［あなたは］与える者である。
この恩恵は母なるジャーンキー[54]（＝シーター）が
［あなたに］与えた。

राम रसायन तुम्हरे पासा । सदा रहो रघुपति के दासा ॥३२॥

あなたはラームという霊薬を持っている。
［あなたは、］ラグパティ（＝ラーム）に

常に仕える者であって欲しい。

तुम्हरे भजन राम को पावै । जनम जनम के दुख बिसरावै ॥३३॥

あなたを讃えれば、ラームを手にする。
［あなたを讃えれば、］
生れ変わりの苦しみを忘れる。

अंत काल रघुबरपुर जाई । जहाँ जन्म हरिभक्त कहाई ॥३४॥

［あなたを讃えれば、］死後、
ラグヴァル（＝ラーム）のもとに行く。
［この］世界に［再び］生まれれば、
ハリ（＝ラーム）[55] の信者と言われる。

और देवता चित्त ना धरई । हनुमत सेइ[56] सर्ब सुख करई ॥३५॥

他の神を心で想わなくてもいい。
［あなたに］奉仕すれば、全ての楽が訪れる。
ハヌマーンよ。

संकट कटै मिटै सब पीरा । जो सुमिरै हनुमत बलबीरा ॥३६॥

［あなたを］想う人の困難はなくなり、
全ての苦しみは消える。
力ある勇者ハヌマーンよ。

जै जै जै हनुमान गोसाईं । कृपा करहु गुरु देव की नाईं ॥३७॥

栄光あれ。栄光あれ。栄光あれ。
ハヌマーンよ。最高の者よ。
尊師のように、［私に］恩情を与えて下さい。

जो सत बार पाठ कर कोई । छूटहि बंदि महा सुख होई ॥३८॥

［『ハヌマーン・チャーリーサー』を］
百度唱える人は誰でも、
束縛（＝輪廻の苦しみ）を逃れ、
大きな楽がある。

जो यह पढ़ै हनुमान चालीसा । होय सिद्धि साखी गौरीसा ॥३९॥

この『ハヌマーン・チャーリーサー』を読む人には、
完成（＝解脱）がある。
［このことは］ガウリーシュ（＝シヴ）[57] が保証している。

तुलसीदास सदा हरि चेरा । कीजै नाथ हृदय महँ डेरा ॥४०॥

トゥルシーダースは、
常にハリ（＝ラーム）の弟子です。
主（＝ラーム）よ、［私の］心に住んで下さい。

दोहा （ドーハー）
पवनतनय संकट हरन मंगल मूरति रूप ।
राम लषन सीता सहित हृदय बसहु सुर भूप ॥

パヴァンの子よ。
困難を取り除く者よ。幸福の姿をした者よ。

ラーム、ラクシュマン、シーターと一緒に、
［私の心に］住んで下さい。神の王よ。

註

1)　サンスクリット語では「ラーマ（Rāma）」と発音されるが、ヒンディー語では語末の a が発音されず、「ラーム（Rām）」となる。基本的にアワディー語も語末の a を発音しないため、本稿では、サンスクリット語の発音ではなく、アワディー語の発音に従って、翻訳した。従って、「シャンカラ」は「シャンカル」に、「シヴァ」は「シヴ」に、「ラクシュマナ」は「ラクシュマン」に、「ヤマ」は「ヤム」等となる。

2)　他にも27の作品がトゥルシーダースに帰せられているが、それらは真作とは認められていない。『南アジアを知る辞典』平凡社、1992年、p.491参照。

3)　少数ながら、現在でもアワディー語の話者は存在する。Cf. Indresh Thakur and Surya Prasad Yadav: *A Sociolinguistic Survey of Awadhi,* Nepal, 2013.

4)　このような発音と表記の相違によって、固有名詞の शंकर も संकर と表記されているが、翻訳では、「サンカル」とはせずに、「シャンカル」とし、固有名詞はヒンディー語の発音に従った。ヒンディー語とアワディー語の発音と表記の相違については、Edwin Greaves: *Notes on the Grammar of the Ramayan of Tulsi Das,* Benares, 1922, pp.8-9にまとめられている。

5)　参照したテキストの中には、 बिद्या を विद्या というように、ヒンディー語の発音によって表記しているものもいくつかあるが、これらについては、異読として示すことはせず、表記以外のものを異読として、注に示した。

6)　बरनउँ を बरनऊँ とする読みもあり。

7)　富と愛と善と解脱という四つの人生の目的。

8)　「ラグヴァル」はラームの異名の一つで、「ラグ族の最高の者」という意味。ラグ族の祖は日種族のディリープ（दिलीप）王の子であるラグ王。

9)　सुमिरौं をसुमिरौ とする読みもあり。

10)　बुधि を बुद्धि とする読みもあり。

11)　मोहिं を मोहि とする読みもあり。

12)　「パヴァンの子」はハヌマーンの異名の一つで、パヴァンは風の神を意味する。ハヌマーンは実際には母アンジャニー（अंजनी）と父ケースリー（केसरी）の子であるが、二人は子に恵まれなかったため、風の神であるパヴァンを苦行で満足させ、子を授かったことから、ハヌマーンは「パヴァンの子」とも呼ばれるようになった。

13) 天界と地上界と地下界の三界。
14) ハヌマーンの母の名前。
15) 稲妻と訳した बज्र は漢訳されると「金剛杵」になり、インドラの武器である。ハヌマーンが持っている武器は गदा と呼ばれる棍棒である。
16) 「シャンカル」はシヴの異名の一つ。सुवन は太陽、火、月を意味するが、*तुलसी शब्द-कोश, द्वितीय भाग* には、子の意味もあげられている。しかし、ハヌマーンがシヴの子とされることないため、参照した訳に従い、「化身」と訳した。
17) ハヌマーンの父の名前。
18) लषन を लखन とする読みもあり。
19) ラクシュマンはラームの異母弟で、シーターはラームの妻。ラームが策略によって森に追放された時、二人は同行した。
20) 「シヤー」はシーターの異名の一つ。
21) シーターは魔王ラーヴァン（रावण）によってランカー（लंका）島に連れ去られてしまったが、ハヌマーンはシーターを捜して、ランカー島に渡り、小さな姿になって、シーターの前に現われた。ハヌマーンは自在に体の大きさを変えることができる。
22) 魔王ラーヴァンが支配する国。現在のスリランカ。
23) ランカー島に渡ったハヌマーンは魔王ラーヴァンの手下に捕まり、尻尾に火を付けられたが、綱を振りほどき、その火でランカー島を火の海にした。
24) 「ラームチャンドル」はラーマの異名の一つ。チャンドルは月の意味。
25) सजीवन を सँजीवनि とする読みもあり。
26) シーターを取り戻すために、ランカー島に渡ったラームやラクシュマンたちは、魔王ラーヴァンの手下たちと戦うが、その戦いの中で、ある日、ラクシュマンは殺されてしまう。しかし、ヒマーラヤの山にある蘇生草を翌日までに飲ませれば、生き返らせることができると分かり、ハヌマーンは蘇生草を取りに行く。山は見つけたものの、蘇生草が見つからなかったため、山ごと持ち帰り、ラクシュマンを生き返らせた。
27) 「ラグヴィル」はラーマの異名の一つで、「ラグ族の勇者」の意味。
28) कीन्ही を कीन्हीं とする読みもあり。
29) 「ラグパティ」はラームの異名の一つで、「ラグ族の主」を意味する。
30) バラタはラーマの異母弟で、ラクシュマンの異母兄。バラタの実母のカイケーイー（केकेयी）は、策略によってラームを14年間森に追放し、バラタを王にしたが、バラタはそれを受け入れず、ラームを呼び戻すために森に行った。しかし、ラーマは王宮に戻らず、バラタはラーマが戻るまで、王座にはラーマの木のサンダルを置くことした。
31) サナクはブラフマーから生れた四人の子の中の一人。

32)　ヒンドゥー教の三大神の一人で、世界の創造を役割とする神。大海で横になっているヴィシュヌの絵像が見られるが、ヴィシュヌの臍から出ている蓮華の上に座っているのがブラフマーである。

33)　代表的な聖者で、多くの神話に登場し、「神のような聖者（देवर्षि）」と呼ばれることもある。特に、ヴィシュヌの熱心な信者として描かれることが多い。ヴィーナー（वीना）という弦楽器とカルタール（करताल）というカスタネットのような打楽器を持つ。

34)　「シャールダー」はサラスヴァティー（सरस्वती）の異名の一つ。芸術・学問等の女神で、ブラフマーの妻の一人。

35)　シェーシュナーグ（शेषनाग）は、大海で横になっているヴィシュヌの絵像で、ヴィシュヌを支える寝台として描かれることが多い。「アナンタ（अनंत）」と呼ばれることもある。

36)　दिगपाल を दिक्पाल とする読みもあり。

37)　सके を सकै とする読みもあり。

38)　ヤムは、本来は死の世界を支配する神であったが、後に死んだ人間を裁く王になった。

39)　クベールは、もともとは魔族の王であったが、後に財宝の神になった。

40)　テキストに否定辞はないが、参照した英訳とヒンディー語訳に従った。

41)　スグリーヴは猿族の王の子。

42)　スグリーヴは、兄のバーリ（बालि）に追放されていたが、バーリを倒し、王座についた。そのためには、ラームの力を必要とし、ハヌマーンがバーリにラームを会わせた。ハヌマーンはスグリーヴの軍の指揮官。

43)　ヴィビーシャンは魔族で、ランカー国の王ラーヴァンの弟。

44)　ヴィビーシャンはラームの熱心な信者で、シーターを捜して、ハヌマーンがランカー国に渡った時に、協力した。ラームの軍とラーヴァンの軍の戦い際には、ラームの軍につき、ラーヴァンが殺された後、ランカー国の王になった。

45)　インドの古い距離の単位。１ヨージャンは約４マイル、８マイル、16マイル等と言われる。

46)　インドの神話的歴史観による時代のこと。クリタ（कृत）、トゥレータ（त्रेता）、ドゥヴァーパラ（द्वापर）、カリ（कलि）の４つがあり、だんだん悪い時代になる。４つのユグを合計した神の１万２千年（人間の432万年）が単位としての1ユグになる。

47)　ハヌマーンがランカー国に渡り、シーターを見つけた時、ラームの使者であることの証拠として、ラームはハヌマーンに自らの指輪を持たせた。

48)　ते を तें とする読みもあり。

49)　「マハーヴィール」はハヌマーンの異名の一つで、「偉大な勇者」を意味する。

50) तें を ते とする読みもあり。

51) सोइ を सोई とする読みもあり。

52) 八つの神通力とは、①体を小さくすること（अणिमा）、②体を大きくすること（महिमा）、③体を軽くすること（लघिमा）、④体を重くすること（गरिमा）、⑤どこへでも行けること（प्राप्ति）、⑥望みを叶えること（प्राकाम्य）、⑦あらゆるものを支配下におくこと（ईशित्व）、⑧他人を意のままにすること（वशित्व）である。

53) 九つの宝は、もともとは財宝の神クベールの持ち物で、①大蓮華（महापद्म）、②蓮華（पद्म）、③法螺貝（शंख）、④マカラ石（मकर）、⑤カッチャパ石（कच्छप）、⑥ムクンダ石（मुकुंद）、⑦クンダ石（कुंद）、⑧サファイア（नील）、⑨カルヴァ石（खर्व）である。

54)「ジャーンキー」はシーターの異名の一つで、「ジャナカ（जनक）の娘」を意味する。ジャナカはミティラー（मिथिला）国の王の名前。

55)「ハリ」はラームの異名の一つであるが、ヴィシュヌの異名でもある。

56) सेइ を सेई とする読みもあり。

57)「ガウリーシュ」はシヴの異名の一つで、「ガウリーの主」を意味する。ガウリー（गौरी）はシヴの妻で、パールヴァティー（पार्वती）の異名の一つ。

参考文献

बच्चूलाल अवस्थी: *तुलसी शब्द-कोश, प्रथम भाग,* बुक्स एन' बुक्स दिल्ली, १९९१.

बच्चूलाल अवस्थी: *तुलसी शब्द-कोश, द्वितीय भाग,* बुक्स एन' बुक्स दिल्ली, १९९१.

धीरेन्द्र वर्मा: *ब्रजभाषा व्याकरण,* इलाहाबाद, १९५४.

Edwin Greaves: *Notes on the Grammar of the Ramayan of Tulsi Das,* Benares, 1922.

G.A. Grierson: *Specimens of the Eastern Hindi Language,* Calcutta, 1904.

हरदेव बाहरी: *अवधी शब्द-सम्पदा,* इलाहाबाद, १९८२.

Indresh Thakur and Surya Prasad Yadav: *A Sociolinguistic Survey of Awadhi,* Nepal, 2013.

कन्हैं सिंह और अनिल कुमार तिवारी: *मध्यकालीन अवधी का विकास,* वाराणसी, २०००.

Rupert Snell: *The Hindi Classical Tradition – A Braj Bhāṣā Reader,* London, 1991.

विश्वनाथ त्रिपाठी: *प्रारम्भिक अवधी का अध्ययन,* इलाहाबाद, १९७२.

विश्वनाथ पाठक: *लघु अवधी शब्दकोष,* नेपाल, सं० २०५७.

Winand M. Callewaert and Philip Lutgendorf: *Rāmcaritamānas Word Index,* New Delhi, 1997.

（武蔵野大学教授）